

# 公 民 [ 倫 理 ] (100 点 50 分)

2012 年 12 月 7 日 (金) 2 限 実施  
学年末考査  
千葉県立長生高等学校 第 3 学年 ABCD 組  
Edited by K.Kataoka

## 注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 解答用紙はマークシート式です。
- 3 受験番号はアルファベットを数字に直し、次の例のように 5 桁で記入してマークを忘れないこと。  
例 3 年 D 組 1 番 → 30401
- 4 試験中に解答用紙の不足、問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 5 試験終了後、問題冊子は持ち帰って復習をするとともに、答案返却の際に持参すること。



問2 下線部(a)に関連して、儒教における五常とは仁義礼智に何が加わるか、次の①～④のうちから一つ選べ。[3]

- ① 序 ② 信 ③ 別 ④ 親

問3 下線部(b)に関して、四書の書物として適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[4]

- ① 春秋 ② 書経 ③ 礼記 ④ 中庸

問4 下線部(c)に関して、『老子』の記述として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。[5]

- ① 上善は水のごとし。水は善く万物を利して争わず、衆人の悪む所に処る。故に道に幾し。  
② 常に民をして無知無欲ならしめ、かの知者をしてあえてなさざらしむ。無為をなせば、すなわち治まらざるなし。  
③ 人の性は悪なり。其の善なる者は偽なり。今、人の性、生まれながらにして利を好むこと有り。是に順ふ、故に争奪生じて辞讓亡ぶ。  
④ 道の道とすべきは、常の道にあらず。名の名とすべきは、常の名にあらず。無は天地の始に名づけ、有は万物の母に名づく。

問5 空欄【 A 】に入る説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[6]

- ① つつしみによって人欲を捨て、万物にやどる理を窮め、宇宙の理と一体化すること  
② 宇宙の理のあらわれである心の中の理を見極め、それを実践すること  
③ 何事にも作為を加えず、万物の根源としての自然の道に素直に従うこと  
④ 兼愛の道に従うことによって、平等で平和な世の中を作ること

問6 空欄【 B 】に入る説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[7]

- ① 人は無限の欲望をもち、放任しておけば他人の欲望と衝突して争いを起こし、社会は混乱におちいるであろう  
② 有徳者が天命を受けて天下を統治すべきであり、もし徳が衰え民心が離反するようになれば、天命はその者を去って別の有徳者にくだり、ここに王朝の交替が起こる  
③ 人間が真に実在するのは一瞬の「今」だけである。知・行というも分別し限定して表現しているにすぎない  
④ 〈道〉の絶対性のもとでは、現実世界における万物の多様性や価値観の相違などのあらゆる差別相が意味をもたなくなる

第2問 次の文章を読み、下の問い（問1～問4）に答えよ。（配点 14）

ルネサンスは、14世紀に北イタリアの諸都市からおこった。ルネサンスはもともと「再生」という意味のことばで、具体的には、ギリシア・ローマの古典文化の復興を意味する。教会や封建制度の束縛から解かれ、新しい人間像をかたちづくろうとしたとき、ギリシア・ローマの古典をよりどころとして、自分自身のあるべき姿と生活規範を求めたのである。この運動はふつう人文主義（ヒューマニズム）とよばれている。ルネサンスの人文主義の特徴は、人間性の解放と古典古代の復興とが一つに結びついていたことである。

ダンテは『神曲』において、罪に苦悩する人間に対する深い洞察を示した。[ 8 ]は『痴愚神礼讃』で、カトリック教会の偽善を痛烈に非難し、神の摂理に対し人間の自由意志を強調し、それに反対するルターと論争した。(a) ピコ＝デラ＝ミランドラも『人間の尊厳について』の中で、人間は自分のあり方を自由に選ぶ力をもっているところに人間の尊厳がある、と説いた。マキアヴェリは『[ 9 ]』で、政治というものは、宗教や道徳から独立した世界をつくるべきで、それらの干渉をうけてはならないと主張した。

ルターは、人の罪が赦され、神によって正しい人間として認められるには、贖宥状の購入とか、教会の定めた戒律を守るといった外面的な善行は必要なく、ただ各人の内面的な信仰のみが必要であると主張した。またルターは、信仰のよりどころとするものは、神のことばを伝えている『聖書』のみである、という (b) 聖書中心主義の立場に立ち、聖職者の権威を否定して神を信じる者はすべて等しく司祭である、という万人司祭主義の考え方をとった。

カルヴァンは、ルターの思想をさらに実践的に徹底させた。『[ 10 ]』によれば、神は絶対者であって、すべての存在は神の摂理によって導かれている。各人の功績や価値にまったく関係なく、人間の救いはあらかじめ神の自由意志によって決められている。

[ 11 ]が『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で明らかにしたように、カルヴァン主義は「職業人」という、ルネサンスと異なる新しい人間の理想像をつくり上げた。この人間観は、さらにイギリスのピューリタニズムにうけつがれた。禁欲・勤勉・正直などの職業倫理は、これまで卑しいものとされてきた営利活動の正当性を認めることによって、資本主義や市民革命の精神を育てる役割をはたした。

中世においては、キリスト教の世界観にかなう天動説が議論の余地なく信ずるべきものとされていた。そのためコペルニクスやガリレイによって主張された地動説は、教会の権威に真っ向から対立するものであった。しかし彼らは (c) 新しい世界観を打ち出そうとしたわけではなく、観察にもとづいて自然界の事実を解明しようとしたのである。

問1 文章中の空欄 [ 8 ]～[ 11 ]に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①～④のうちから一つずつ選べ。

- [8]      [ ① エラスムス                      ② ボッカチオ  
            [ ③ ペトラルカ                      ④ トマス・モア

- [9]      [ ① 統治論                              ② 君主論  
            [ ③ リヴァイアサン                      ④ 政治学

- [10]     [ ① 神学大全                              ② キリスト教綱要  
            [ ③ キリスト者の自由                      ④ 奴隷意志論



第3問 次の文章を読み、下の問い(問1～問5)に答えよ。(配点 14)

ベーコンによれば、学問はそれ自体が目的ではなく、自然にはたらきかけ、自然を支配し、それを人類の福祉に役立てて人間の生活を豊かにするための手段である。すなわち「[ 15 ]」であり、学問により得た知識を用いて支配を増大することが、人間にとって望ましいあり方である。

日常生活において、人間は多くの誤解や錯覚をもって生きている。ベーコンは、このような偏見や思いこみを(a) イドラとよぶ。これらのイドラを除去したのち、個々の事物や事例に直接当たり、実験や観察を行うことによって、正しい知識が得られる。たとえば、いくつかの物体があるとす。ひとつ目の物体にある作用をおよぼすと、反応があらわれた。二つ目の物体に同じことをすると、最初と同じ反応が出た。三つ目でもその次でも同じ結果であった。そこで私たちは「～という物体は……の性質をもつ」という知識を得ることになる。経験によって得た事実を総そう括かつし、それによってこれらの事実をつらぬく一般的原理・法則を導き出すこの方法を、[ 16 ]という。

ベーコンの学問観や方法論は、現実的・実用的な精神にもとづき、人間の力に対する強い信頼に満ちている。経験論はその後、ホップズ・(b) ロック・バークリ・ヒュームらに継承され、現代に生きつづけている。

早くからアリストテレスやスコラ哲学を学んでいたデカルトは、それらの説に疑問をもち、だれにとっても、どんなときでも確実に疑い得ない原理を探し求めようとした。彼にとって、従来の哲学は、信頼するに足るとはいえないものであったのである。デカルトは、(c) 可能なかぎりすべてのものを徹底して疑うことからはじめる。感覚はしばしば私たちをあざむくものであるから疑わしい。幾何学上の命題も証明をまちがえることがあるのだから、これまで正しいとされていたものでも、疑うに値する。最後に、目がさめているときにもつ思いが夢にあらわれることもあるから、いまこの場所にあることが夢でないとは保証できない。それゆえ、いまこの場所にあるすべてのことが疑わしい。

このように、確実な原理を求めるために疑わしい一切のことを疑う方法的懐疑をへて、デカルトはあることに気づいた。彼は『[ 17 ]』のなかで次のように語る。「私がそんなふうに一切を虚偽であると考えようと欲するかぎり、そのように考えている《私》は必然的に何者かであらねばならないことに気づいた」。

理性的思考を行うことに人間の尊厳を認め、人間の無限の可能性を肯定する合理論は、(d) スピノザ・ライプニッツへと受けつがれ、現代にいたるまで大きな影響をおよぼしている。

問1 文章中の空欄 [ 15 ] ～ [ 17 ] に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①～④のうちから一つずつ選べ。

[15] [ ① 理性の狡知                      ② 自然に従え  
          [ ③ 知は力                         ④ 知は徳

[16] [ ① 弁証法                            ② 演繹法  
          [ ③ 帰納法                         ④ 背理法

[17] [ ① ノヴム・オルガヌム ② ニュー・アトランティス  
          [ ③ 情念論                         ④ 方法序説

問2 下線部(a)に関して、劇場のイドラの例として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[18]

- ① 閉鎖された病院に幽霊が出るという噂話が広がり、土地の持ち主はお祓いをした上で更地にして駐車場にした。
- ② トイレに入ったあとは、トイレトペーパーを三角に折っておくのがエチケットだと思っていたら、それはホテルの掃除済みのサインだということを知って驚いた。
- ③ テレビ番組で放映されたダイエットに効くという食品が、売れ行き好調でスーパーから消えた。
- ④ 蛍光灯の光が1秒間に50～60回点滅していることをはじめて聞いたが、目に力を入れてみても点滅を感じられない。

問3 下線部(b)に関して、ロック、バークリー、ヒュームについてのア～ウの説明についての正誤の組み合わせとして正しいものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。[19]

- ア ロックは「人間の心はタブラ・ラサ(白紙)」であるとして、生得観念によって知識が獲得されることを示した。
- イ バークリーは「存在するとは知覚されることである」として、物体の実体性を否定した。
- ウ ヒュームは、人間は知覚対象に因果関係が存在することを証明することができないとするとともに、人間の自我も「知覚の束」にすぎないとした。

- |   |     |     |     |   |     |     |     |
|---|-----|-----|-----|---|-----|-----|-----|
| ① | ア 正 | イ 正 | ウ 正 | ② | ア 誤 | イ 正 | ウ 正 |
| ③ | ア 正 | イ 誤 | ウ 正 | ④ | ア 誤 | イ 誤 | ウ 誤 |
| ⑤ | ア 正 | イ 誤 | ウ 誤 | ⑥ | ア 正 | イ 正 | ウ 誤 |
| ⑦ | ア 誤 | イ 正 | ウ 誤 | ⑧ | ア 誤 | イ 誤 | ウ 正 |

問4 下線部(c)に関して、この方法をあらわすデカルトの規則として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[20]

- ① 分析の規則      ② 総合の規則      ③ 明証性の規則      ④ 枚挙の規則

問5 下線部(d)に関して、スピノザ、ライプニッツに関する記述として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。[21]

- ① スピノザは著作『エチカ』で、人間の認識能力は自然法則を認識することはできても、神の存在を認識することはできないと考えた。
- ② スピノザは、神、すなわち永遠・無限の本質を表現する無限に多くの属性からなり立つ実体は、必然的に存在すると考えた。
- ③ スピノザは、モナドは意識的もしくは無意識的知覚を有する魂に類似したもの、それぞれに固有の観点から宇宙のいっさいの事象を表出する個体的な実体であると考えた。
- ④ スピノザは、現実的世界の創造に先立つ神の可能的世界の構想のうちに、諸実体の間の調和があらかじめ定められていると考えた。

第4問 次の文章を読み、下の問い(問1～問4)に答えよ。(配点 14)

ホブズが著書『[ 22 ]』で説いた社会契約説は、結果的には統治者に無制限の権力を認めたため、王政復古後の絶対王政の理論的支柱となった。しかし、あくまで契約によって国家の安全と平和を実現させようとした点に意義が認められる。

ロックによれば、人間は本来理性的な存在であり、自然状態は平和である。その状態においては、(a)人間が生まれながらに持つという自然権は、理性にもとづく自然法により保障されている。しかし、自然状態においても自然権をめぐる争いが生じてくるため、自然権を確保するための契約が必要となる。そこで、自然法にもとづいた人為的な法律の支配のもとに、人民は自然権を政府に信託する。政府の最高機関は議会であって、国家の安全と平和を守り、自然権を保障する。人民は自然権の執行を政府にゆだねるが、政府が人民の権利を保障せず権力を濫用する場合、人民は政府に対する [ 23 ] をもつ。

17～18世紀に展開された啓蒙思想運動は、封建的・宗教的な権威や習慣、偏見などにとらわれている人間の理性を啓発し、個人の自由・平等を訴え、前近代的な諸制度からの解放を主張した。(b)モンテスキューやヴォルテール、『[ 24 ]』の編集にあたったディドロらはその代表である。

(c)ルソーは『人間不平等起源論』のなかで、社会の腐敗・墮落をきびしく批判する。彼は、この状態を正すには、まず人間が本来どのような状態であったかということに関心を払わねばならないという。彼によれば、人間の自然状態は平和であり、たがいに自由・平等で、思いやり(あわれみ)により自己愛を規制し、信頼に結ばれた理想的なものであった。

ところが、産業が発達し、財産の私有がはじまると、富者と貧者とのあいだに支配と服従の関係が生まれ、悪徳と不平等が社会に広がった。この無秩序の状態を脱するため、契約が結ばれ、国家が成立した。だが、それは富者が財産を守るために貧者をあざむいてつくった偽りの契約であったため、社会はますます不平等・不合理なものとなった。「自然に帰れ」ということばは、当時の社会を鋭く批判し、自由・平等であった自然状態の回復を主張している。彼によれば、人間はだれでも自由と平等を志向する共通の意志をもっている。これを体現するものを [ 25 ] という。人々は契約を結ぶときに、[ 25 ] にしたがってみずからの自由と権利を国家にゆだねる。契約にもとづき、[ 25 ] のもとに成立した国家は、この意志に忠実にしたがって、それを実現しなければならない。国家の主権は人民に属し、政府や統治者は公僕である。[ 25 ] にしたがうかぎり、主権者としての人民は、国家によってその権利を保障されるのである。

問1 文章中の空欄 [ 22 ] ～ [ 25 ] に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①～④のうちから一つずつ選べ。

- [22] [ ① リヴァイアサン      ② 市民政府二論  
          ③ 君主論                ④ 社会契約論

- [23] [ ① 生存権                    ② 社会権  
          ③ 自由権                 ④ 抵抗権

- [24] [ ① 百科全書                ② 法の精神  
          ③ 哲学書簡               ④ 自然の体系

- [25]    ⎧    ① 特殊意志                      ② 全体意志  
          ⎩    ③ 人民意志                      ④ 一般意志

問2 下線部(a)に関して、ロックの自然権についての記述として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[26]

- ① 個人の生命・自由・財産の所有権
- ② すべての人が最低限の生活を保障される社会権
- ③ 生存のための欲求とそのため力の行使としての自己保存権
- ④ 人間として生まれた以上従わなければならない平等権

問3 下線部(b)に関して、モンテスキューの著作についての記述として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[27]

- ① 契約説に依拠して政治的統治の真の起源、範囲、目的を論じ、政治権力の絶対性を否定してその目的による制限を説く。
- ② 各個人が自分のもつすべて、すなわち財産や、必要とあれば生命をさえ全体に譲渡し、そのことによって強い力を蓄えた全体が各構成員を保護するという契約を構想した。
- ③ 人間を、精神をも含めて、完全に機械であるとする議論を展開し、精神現象をもすべて機械的な物質現象に還元することを試みた。
- ④ ペルシアの高官が故国を離れフランスに滞在し、友人や召使と交換する手紙を通して、18世紀初頭のフランスとヨーロッパの社会状況を批判・風刺する。

問4 下線部(c)に関して、ルソーの思想についての記述として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。[28]

- ① 土地に囲いをして「これはおれのものだ」ということを思いつき、人々がそれを信ずるほど単純なものである、ということを見出した最初の人間が政治社会の真の創立者だった。
- ② 社会のすべての構成員は、みずからと、みずからのすべての権利を、共同体の全体に譲渡するのである。
- ③ ふつう民権とよばれているものにも、二種類あります。イギリスやフランスの民権は回復の民権です。下からすすんで取ったものです。
- ④ 人間は生まれながらにして自由であるが、しかしいたるところで鉄鎖につながれている。ある者は他人の主人であると考えているが、事実は彼ら以上に奴隷である。



- [31]    [    ① 自己責任    ② 自由意志  
          [    ③ 他律        ④ 自律

- [32]    [    ① アウフヘーベン    ② アリエネーション  
          [    ③ アンチテーゼ     ④ アウトレイジ

問2 文中の空欄【 A 】に入る文として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[33]

- ① 認識が経験を形成するのではなく、経験が認識を形成する
- ② 経験が認識を形成するのではなく、認識が経験を形成する
- ③ 認識が対象をなぞるのではなく、対象が認識にしたがう
- ④ 対象が認識にしたがうのではなく、認識が対象にしたがう

問3 文中の下線(a)に関して、道徳法則の例として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[34]

- ① それが善いことだから、困っている人がいたら手助けをなさい。
- ② 受験の面接の話題作りをしたいなら、ボランティアをなさい。
- ③ 体調と機嫌が良いときには、電車の席を高齢者に譲りなさい。
- ④ 法律を破ると刑罰が待っているから、いつでもどこでも常に法律を守りなさい。

問4 文中の下線(b)に関して、ヘーゲルの人倫についての説明として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。[35]

- ① 人倫は、人間が生活するうえで行為の規範となる法と道徳とを総合したものである。
- ② 家族は、夫婦や親子など愛によって結ばれている自然的な共同体である。
- ③ 市民社会は、独立した個人が各自の利害を追求する「欲望の体系」をなす。
- ④ 家族と市民社会を統合した国家は「人倫の喪失態」にはかならない。

第6問 次の文章を読み、下の問い（問1～問4）に答えよ。（配点 14）

自然科学の発展は、社会のとらえ方にも大きな影響をあたえた。たとえば19世紀にフランスの〔36〕が提唱した実証主義がその典型である。〔36〕は、科学一般の使命は「予見するために見る」ことであると主張し、自然と同じように社会についても、それを支配する法則が発見されるべきであると考えている。〔36〕によれば、社会についても、検証可能な経験的事実にもとづく法則を見いだすことができるのであって、その法則を見とおしながら社会を進歩させることが、社会を対象とする科学の役割なのである。

重要なのは、結果的に最大の幸福を得る人の数を最大とする行為を重んじることである。(a)「最大多数の最大幸福」という一句がベンサムはこの考え方を的確にあらわしている。これは、封建制や絶対王政下で成り立つ少数者の幸福ではなく、万人が平等で最大の幸福にあずかる権利をもつという、平等と個人の尊重の精神をしるしたものである。

ベンサムの影響を受けながらも、異なる人間観から出発したミルは、人間が求める快樂には量的に計算できないものもあり、計算することのできない精神的快樂を、より質の高いものとして尊重する。この立場を質的功利主義という。人間の精神的側面を強調したミルは、制裁についても、〔37〕という内的制裁を主張した。

パースの考え方を発展させたジェームズは、『プラグマティズム』をあらわし、「いかに生活に役立つか」という点から価値の問題を論じている。彼によれば、理論の真偽、行為の善悪、ものの美醜などは、それが人生において〔38〕であるか否かによってその価値が決まる。〔38〕なものこそが真理なのである。さらに彼は、この実用主義とよばれる立場から宗教の価値を論ずる。すなわち、神の存在の有無など観念的な議論は必要でなく、人々に安心や充実感をあたえ、人生を豊かにするものであるなら、宗教は真理である。彼はこのように、実用主義の立場から、科学的な思考と宗教とを調和させようとした。

(b)プラグマティズムを発展させたデューイは、現代社会の諸問題をヨーロッパの伝統的な哲学で解決することは不可能であり、社会の進歩に即応する哲学が必要であると説く。

マルクスによれば、もともと人間は労働をその本質とし、ものをつくり出し生活を向上させていくことに、根本的な喜びを見いだすものである。しかし、資本主義社会ではほとんどの生産物は商品となり、労働力までもが商品化されて労働者は雇われてはたらかされる存在となり、創造の喜びや誇りは失われた。しかも労働の成果である生産物は労働者のものとはならず、労働者は生産物から遠ざけられている。これを労働の〔39〕という。

この原因は資本主義の体制そのものにあるのだから、労働者を解放し、その人間性を回復するためには、(c)「革命によって社会制度を根本から改革することが必要である」、とマルクスは主張した。

問1 文章中の空欄〔36〕～〔39〕に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①～④のうちから一つずつ選べ。

- [36]    [ ① ダーウィン                      ② コント  
          [ ③ スペンサー                    ④ フーリエ

- [37]    [ ① 良心                                ② 利己心  
          [ ③ 共感                                ④ 宗教



第7問 次の文章を読み、下の問い（問1～問4）に答えよ。（配点 16）

キルケゴールは、『日記』のなかで次のように語っている。「私に欠けているのは、私は何をなすべきかということについて私自身に決心がつかないでいることなのだ。大事なことは……私にとって真理であるような真理を発見し、私がそれのために生き、そして死にたいと思うようなイデー（理念）を発見することなのだ」。大切なのは自分がどう生きるかであり、  
[ 43 ] こそが求められるものである。

ニーチェは、みずからが生きている 19 世紀のヨーロッパはニヒリズムにおちいつているとする。ニヒリズムとは、生存の意義や目的を喪失した [ 44 ] のことである。ではなぜ、この世界はニヒリズムにおちいったのか。彼によれば、キリスト教は弱者を甘やかす教えであり、大衆的な利己主義の元凶であり、強者へのルサンチマン（怨恨）に満ちた奴隷道徳である。彼は、キリスト教を中心とする既成の道徳がこの世界にニヒリズムを生み出したのであり、(a)それに代わる新しい価値をつくり出すことでニヒリズムを克服し、真に人間らしい生活をおくることができる、と主張する。

ヤスパースによれば、人間は日常生活のいたるところで [ 45 ] に囲まれている。  
[ 45 ] とは、死・苦・闘・罪など、人間の力でも科学技術でも克服することのできない、壁のような状況のことである。[ 45 ] に直面したとき、人間ははじめて自己の有限性を自覚する。人間は不安と絶望のなかで挫折感を味わうが、そのとき、自己の有限性を知らせ、自己と世界のすべてをささえ包みこむ包括者（超越者）と出会う。包括者との出会いによって、人間は実存に達するのである。

「存在するとは何か」について、すぐさま答えられる人間は誰もいない。けれども、人間は少なくとも、そもそも何かが存在するとはどういうことか、と問うことができる。存在をそのように問うことができるあり方に注目して、ハイデッガーは、人間をとくに [ 46 ] と名づける。この [ 46 ] こそが、ハイデッガーによれば、存在の問いへの通路なのである。

フランスのサルトルは、『実存主義はヒューマニズムである』において、次のように述べる。日常使う道具は、ある目的を達成する手段であって、その性質はあらかじめ決まっている。しかし、人間は道具とは異なる。人間は将来を選ぶ自由をもち、自分自身をつくりあげていく存在である。これを [ 47 ] 存在という。人間は何になるかあらかじめ決まっておらず、みずからの行為によって英雄にもひきょう者にもなる。事物ではその本質が存在に先行しているが、人間においては「【 A 】」のである。

問1 文章中の空欄 [ 43 ] ～ [ 47 ] に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①～④のうちから一つずつ選べ。

- [43] [ ① 客観的真理                      ② 相対的真理  
          ③ 絶対的真理                      ④ 主体的真理

- [44] [ ① 全体主義                              ② 無政府主義  
          ③ 虚無主義                              ④ 批判主義

- [45] [ ① 顔    ② 限界状況  
          ③ 実存    ④ 絶望

- [46]    [ ① 即自的存在                      ② 道具的存在  
          [ ③ 世人（ひと）                ④ 現存在

- [47]    [ ① 投企的                            ② 情熱的  
          [ ③ 本質的                           ④ 決定的

問2 下線部(a)に関して、ニーチェの超人についての説明として、最も適当なものを、次の

①～④のうちから一つ選べ。[48]

- ① 自己が実存へと成長する戦いであり、愛しながらの戦いである。
- ② 神の前に自分一人で立ち、自己の自由とともに生じる責任を神の前で受け取る人間の在り方。
- ③ 自由の刑に処せられていることを自覚し、全世界の責任を一手に引き受けて社会に参加する人間。
- ④ 新しい価値の創造という遊戯を行うことができるのは、無垢な精神を持った「小児」だけである。

問3 下線部(b)に関して、ハイデガーの思想についての説明として最も適当なものを、次の

①～④のうちから一つ選べ。[49]

- ① 身体を人間と世界、主体と客体とが混ざり合う「両義性」の場として、人間の言語活動も精神活動ではなく身体の所作として捉える。
- ② 人間は日常的に、事物と、事物がかたちづくる世界にかかわり、世界のうちで他者と関係している。現存在とは、その意味でつねに「アンガジュマン」にほかならない。
- ③ 人間は「死への存在」として、置き換えようのない実存として自覚されるとき、自分の過去のあり方と未来の姿を、それぞれにかけがえのないものとして受けとめ、時間的存在である自己を自覚するのである。
- ④ 無反省な自然的態度をあらため、世界が無条件に存在しているという確信を停止することをエポケー（判断停止）という。

問4 文中の空欄【 A 】に入る文として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[50]

- ① 本質は実存に先立つ
- ② 実存は本質に先立つ
- ③ 世界内に存在する
- ④ 自由意志がそれを決める

これで問題は終わりです。